

プログラム・ノート

飯尾洋一

R. シュトラウス：弦楽六重奏のための『カプリッチョ』

『カプリッチョ』は1942年に初演されたりヒャルト・シュトラウス(1864～1949)最後のオペラ。テーマは、オペラにおいてより大切なのは音楽なのか、詩なのか。18世紀にアントニオ・サリエリ(1750～1825)が書いたオペラ『まずは音楽、お次が言葉』を着想源に、伯爵令嬢が音楽家と詩人のふたりから求愛され、選択を迫られる様子を描く。作品の冒頭で演奏されるのが、この弦楽六重奏。登場人物の音楽家が作曲したという設定で物語の幕が開く。

シェーンフィールド：『カフェ・ミュージック』

ポール・シェーンフィールド(1947～2024)はアメリカ出身の作曲家、ピアニスト。民俗音楽やポピュラー音楽のスタイルをとり入れた作風で知られる。『カフェ・ミュージック』はセントポール室内管弦楽団により委嘱され、1987年に初演された。曲のアイデアは作曲者が1985年にミネアポリスのレストランでピアニストを務めた際に浮かんだという。レストランのトリオが演奏するディナー音楽の高級バージョンを書こうと考え、ブロードウェイ風、ウィーン風、ロマ風、ユダヤの音楽など、さまざまな要素をこの一曲に盛り込んだ。

サラサーテ：『ナヴァラ』作品33

パブロ・デ・サラサーテ(1844～1908)はスペインのナヴァラ州出身の大ヴァイオリニスト、作曲家。幼少期より神童として知られ、時代を代表する名手として世界各地を旅した。『ナヴァラ』は故郷へのオマージュともいべき作品で、1889年に2台のヴァイオリンとピアノのために書かれた。ふたりのヴァイオリニストによるレチタティーヴォ風の導入部に続いて、超絶技巧をふんだんに散りばめた活発なスペイン舞曲がくりひろげられる。火花の散るような技巧的パッセージを両奏者間で同期させる離れ技が要求される。

シューベルト：弦楽五重奏曲 ハ長調 D. 956

1828年、フランツ・シューベルト(1797～1828)は、世を去るわずか2か月前に弦楽五重奏曲を書きあげた。作品は初演も出版の機会もないまま埋もれてしまうが、ようやく1850年に初演された。五重奏の編成はモーツァルトのヴィオラ2台の前例に従わず、チェロ2台が用いられ、深く豊かな響きが生み出される。作品規模はきわめて大きい。第1楽章は深遠さと歌の要素を兼ね備える。第2楽章は崇高で瞑想的。中間部で激情がほとばしる。第3楽章では獷猛なスケルツォと陰鬱なトリオが極端な対比を描く。第4楽章はハンガリー舞曲風が始まる。ノスタルジーをにじませながら、熱狂的なコーダへと向かう。

(いいお よういち・音楽ジャーナリスト)